創立145年
ドイツ音楽史と共にある
ドレスデン・フィル

ドレスデン・フィルは、1870年創立という長い歴史を持つ。1885年からは、演奏会場に由来する商工会議所管弦楽団を名乗り、フル・シーズンでの活動をスタートさせた。そして時代を映し出すように、ブラームス、ドヴォルザーク、チャイコフスキー、R.シュトラウスといった大作曲家たちが指揮台に立って興隆を極めた。1915年からは現在のドレスデン・フィルと改名、1934年から10年ほど首席指揮者を務めたパウル・ファン・ケンペンによって名実ともに大きな発展を遂げた。さらにアーベントロートやベイヌム、ヨッフム、カイルベルト、E.クライバー、クナッパーツブッシュ、ニキシュ、ケーゲル、ブラッソン、ヤノフスキ、そしてデ・ブルゴスら20世紀を代表する錚々たる名指揮者たちが、このオーケストラに濃厚な伝統と清新な息吹を注ぎ込んだのである。

ベートーヴェンは語られるべきもの
ブラームスは歌われるべきもの

2013年6月、ミヒャエルはドレスデン・フィルを率いて初来日を果たした。その折はベートーヴェン「交響曲第7番」、ブラームス「同第1番」、上原彩子をソリストに迎えてのベートーヴェン「皇帝」、川久保賜紀とのメンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」など、ドイツものを主軸としたプログラムだった。また第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンを指揮者の両翼におく対抗配置を採り、実にオーソドックスな解釈ながら細かいニュアンスを微妙に変化させ、並々ならぬ手腕で圧倒した。

ミヒャエルは、どんなに歴史を持つオーケストラでも、指揮者の義務として変化・変容をもたらさなければならないと語っており、ベートーヴェンについても伝統的な音色を携えつつ新しい方向性を確立したいと重ねているのだ。現在ドイツでは、ベートーヴェンやブラームスなどのプログラムはあまり受け入れられず、今回のオール・ベートーヴェン（札幌、所沢を除く）のようなコンサートはミヒャエルにとって

©Marco Borggreve

も、大きな意義を感じるという。

ベートーヴェンの音楽は格別だ。ベートーヴェンは計り知れない責任感を持って演奏しなければいけないという指揮者もいる。ミヒャエルも、古典的かつ古楽的な解釈を視野に入れながら、当時の様式を追求していかなくてはならないし、ブラームスは歌われるべきものであって、ベートーヴェンは語られるべきものであるというアプローチが大切であると力を込めるのだ。

今回のツアーで演奏されるのは、いずれもベートーヴェンの中枢を担う代表的な楽曲であり、"傑作の森"とも呼ばれる創作中期から後期へと移行する時期の名作である。また札幌ではメンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」、所沢ではブラームス「交響曲第1番」という前回採り上げられた楽曲も加えられる。"男子3日会わざれば刮目せよ"という。この2年の間、いかにミヒャエル・ザンデルリンクとドレスデン・フィルが密接にコミュニケーションを深め、今日の演奏会でどれほど崇高かつスケールの大きなベートーヴェン像を描くのか、大いに期待したい。

真嶋 雄大（まじま・ゆうだい）
新聞や音楽専門誌、コンサートの曲目解説、CDやDVDのライナーノート等に執筆の他、NHK-FMへの出演、コンクールの審査員、また全国展開するレクチャー・コンサート等旺盛に活動している。著書に「グレン・グールドと32人のピアニスト（PHP研究所）」、「ピアニストの系譜（音楽之友社）」等、監修に「新編ピアノ＆ピアニスト」等。「真嶋雄大の面白クラシック講座」主宰。

SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie